

『上野直昭日記』を見ると、二十二年五月から大学設置に関する記述が現われ始める。本校側は上野直昭、村田良策、西本順が、また、東京音楽学校側は小宮豊隆、城多又兵衛が計画を練り、同年十月には両校を母体とする芸術大学を設立し、芸術高等学校を付設する案がまとまった様子である。同年十二月には各教室主任に対して校長から計画の説明がなされた。そして、翌二十三年四月には次の記事に明らかのように一般社会に対しても計画が公表された。

生れる芸術大学 音楽、美校を統合

東京音楽学校と東京美術学校を合せて新しい芸術大学を作る案は両校の間で話が推められていた、このほど一應の結論がに達したのでそれぞれ両校から具体案が文部省に提出された

それによると新大学の機構は音楽、美術両校を芸術大学の音楽部、美術部とするもので音楽部は第一類、作曲、和声、対位法の各科、第二類、声乐、オペラ、合唱の各科、第三類、ピアノ、オルガン、ハープ、絃楽打楽器の各科、第四類、指揮科、第五類、西洋音楽史、東洋音楽史、音楽理論、音楽学の各科、第六類、能楽、箏曲、長唄の各科（未定）

美術部は絵画、彫刻、工藝、建築、学藝の各科からなり音楽部では学部の外に三年制の東京音楽高等学校を附設することを望んでいる

この学校側からの案に對して文部省では音楽部を作曲、声乐、器樂、指揮、樂理の各科にまとめる案を提示、近く学校側、文部省両者の間で折衝して最後案を決定する、なお初代総長には現音楽

学校校長小宮豊隆氏が擬せられている。

（昭和二十三年四月二十二日『毎日新聞』）

② 石井教室事件

敗戦後間もない混乱の時期に、彫刻科塑造部に起こったいわゆる石井教室事件は、新聞に取り上げられたりしたため、世の注目を集めた。この事件は『日本美術年鑑』（昭和二十二年、二十六年版。美術研究所）にも、

〔昭和二十二年五月〕一〇日東京美術学校彫刻科学生によつて彫刻科石井鶴三教授反対の声明書が学校当局、文部省などに提出され問題となつたが、平櫛・石井二教室制が採用され、六月山本豊市・菊池一雄が迎えられて解決した。

と明記されている。本校の歴史上、かつて生徒がこのように強硬な教授排斥運動を引き起こした例はなかったから、これは極めて特異な事件であったと言えよう。敗戦後の時代的特色が色濃く反映した事件であったという点でも注目される。これについては種々の記録が現存し、また関係者の証言も得られたので、ここにその経緯を記す。

先ず、石井鶴三教授および笹村草家人助教は、既述のように昭和十九年改革によつて本校に赴任したが、その頃の彫刻科の様子を推測する手掛かりとして基俊太郎氏の文を引用する。

昭和十九年敗戦色濃く、上野の東京美術学校は上級生が学徒出陣、それを送り出す残った連中が東京駅の丸の内広場でヨカチン

を踊って憲兵隊に追い回され、今後美校生は東京駅前に集ま
てはならぬという通達が出た。そこで上野駅前で通行人がげん
な顔で眺める中でヨカチンを踊ったりした。そうしたデカダン美
校生も勤労働員にかり出され、学内は空っぽの日が続いた。

六月のある日、その日は珍しく私たち（本科塑造一年）は教室
でモデルを前に粘土をいじっていた。そこへいきなりドアが開い
て見知らぬ二人連れが入って来た。若い方は作務衣姿に笠をしよ
っていた。そっちの方が教室の高窓を見上げ「先生、明りは高窓
が良いでしょうか」と一方に尋ねた。何んだこの二人はと、私た
ちはあっけにとられた。先生の方が石井鶴三で若い方が笹村草家
人であったのだが、その時私たちは美校の教授陣の総入れ替えを
知らされた。新任助教授の草家人が私たちを前に「君たちは勤勞
奉仕と彫刻と一体どっちが大事なんだ、国家存亡の時こそ彫刻を
やるべきではないか」と一喝した。

新しく設けた教官室に塑造の残存学生を召集して助教授の訓話
が始まり、教授は傍らで黙っている。私はあまり面白くないので
学校をなまけているうちに十月に入隊しなければならなくなっ
た。旅順で海軍予備学生の教育を受けた翌年、館山の砲術学校を
出て、佐世保の山中で終戦を迎えた。

東京へ戻っては見たもののいきなり復学する気にもなれない。
その頃、旧美校時代に東洋美術史を講義していた鎌倉芳太郎先生
と知り合うことになった。鎌倉先生は昭和十九年の美校の教授総
入れ替えの際、学校を退いた人である。先生の話しては退陣組は
こぞって日本画の教授結城素明の机に辞表を出したという。退陣

側から見ると当時の改組はクーデターであった。その背後に大
観、護立の大立者がいたと聞く。

改組（後）は油科は梅原、安井、日本画と彫刻は日本美術院の
同人で占められ、画壇でいえば文展系が閉め出されたのである。
美校を制する者は画壇を制する戦前の構図であった。

上野の山は復員学生が戻り始めた。学徒出陣の時、校庭で澤田
源一校長が全校生を前にして「みんな死なずに帰って来て下さ
い」と訓辞をしたのだが、この文部省から来た澤田校長はすでに
退き、校長は上野直昭先生になっていた。彫刻科は木彫部が平櫛
田中、塑造部が石井鶴三が教授である。塑造部の私たちは石井教
授につくことになったのだが、戦地から帰って来たら、様子がま
るで違うので学生の間には石井教室排斥運動が始まった。私もその
渦中に入ったが石井教室側についた。「下略」

〔私見・石井鶴三先生——芸大時代、思い出す儘——〕『石井鶴三
作品集』平成四年、礒山美術館

十九年改革による突然の指導者交替に生徒たちは当惑したが、彫
刻科では特にそれが甚だしかったようだ。しかし、生徒の多くは出
征し、二十年春には諸学校授業停止の命令が出されたので、動搖の
起こる間もなかった。かくて二十年八月十五日の終戦を迎え、徐々
に復員生徒が登校しはじめて、十月一日に学校再開の式が行われた
のであるが、この日の出来事をやはり塑造部の生徒であった岩田健
氏は日記に次のように記している。

20・10・1 この日より美術学校再開。中野巖、小川智、村井真

一、岩田、登校。十時より講堂にて式。校長（上野直昭）先生訓話、村田良策先生諸注意。塑造部（改組前、朝倉「文夫」、北村

〔西望〕先生に指導されていた者）は全員、石井教室に集まるとの指示で、同上四名及阿井正典、松田博、四月の新入生二名、他合わせて二十名足らず、石井教室に集合。十一時～三時。たつぷり四時間の間、石井鶴三先生は火鉢を前に畳に坐り、後ろに小川先輩学生が控え、笹村草人助教は楯に腰掛け、我々は土間に正座してお説教を聞いた。（〔中略〕助教の独演会。石井先生は何も言わず。「伝心録」回覧の後、小川先輩学生が一席ぶった。

——伝心録末尾には、石井教室一同の毛筆の署名と拇印があった。終了後、何か暗澹たる気持で帰路につく。

石井、笹村両教師は戦後の教育を開始するにあたり、精神修煉道場のような方法を適用しようとしたのであった。

回覧された「伝心録」は笹村が昭和二十年の立春から二十二年にかけてその所感を書き綴ったもので、第一冊（美校同窓会用箋使用）と第二冊（美校用箋使用）の二冊が現存する。所々に、その国粹主義的内容が問題となって文部省ないしGHQに提出を求められた際に書き加えた注意書きがあり、それによると、「教室に於ける彫刻の制作、批評、講義以外に、学生と教育者の個人的人格の交流により彫刻教育の神髄に触れしめんとする」ために執筆したものであり、石井はじめ石井教室に入入りする学生の披見に任せたものだという。GHQ提出の際は外に講義草稿、笹村の人物および平素の

言動に関する石井の意見書、石井教室に対する誹謗事件の声明書、同教室生徒の所感等、副資料を添えたことが記されているが、それらの所在については未詳である。

さて、その内容だが、石井が「驛馬なり」（『上野直昭日記』参照）と評した笹村の手柄を考えれば、粗野な言葉、粗野な文字で率直に考えを綴った点は首肯できるとしても、石井教室・研究室を松下村塾になぞらえ、ここは精神第一主義を旨とする道場であるとしてその主義、規則を説き、先生（石井教授）を信じない者は去れ、と唱えるあたりは多分に威圧的であって、死地を潜って漸く復員してきた生徒やあるいは今こそ自由を謳歌せんとしていた生徒のなかに、これを読んで強く反発する者があったとしても不思議ではない。

「披見に任せた」と記されているが、第一冊の冒頭に「学生心得可條々多し 熟読し吟味すべし」と記されていることや、前出岩田氏の日記の記述からみても笹村は石井の了解ないし指示のもとに半ば強制的に読ませたものようである。

岩田氏の日記によれば、笹村は十月三日に生徒に対して石井教室に残るか去るかを七日までに返答するよう命じた。そうした強圧的な態度に反発した生徒たちは授業をボイコットし、入谷昇助教や村田良策生徒主事、あるいは校長に訴えた。上野校長も、日記に

「二十一年十一月二日」学生三人来る（塑造三年、復員者）。笹村のやり方につきて訴える処あり。理由ありと認む。」

と記しているように、生徒の意見を聞き入れ、石井に問題解決を指

示した。しかし、事態は好転せず、年を越して二十一年一月、反対派の主だった生徒たちは岩田氏宅（川口市の大地主であった）の弓道場をアトリエとし、モデルを雇って勉強を開始。ただし、入谷昇助教の忠告を受けて、三月からは学校の一角に移って勉強を続けた。五月十日には学生大会が開かれたが、その際は反対派と賛成派との間で激論が闘わされ、これを翌日の『東京新聞』が「封建性への火の手、美校生、石井教授の退陣を迫る」という見出しで報じ、反対派による石井排斥の声明書を公開したため、問題が明るみに出て、その結果、卒業生その他外部から紛争に介入する動きも現れはじめた。反対派は石井の作家としての価値まで全面的に否定したわけではなく、その国粹主義的思想と指導法が、私塾ならいざ知らず戦後の第一歩を踏み出そうとしている彫刻家の最高教育機関において適用されることに憤りを感じて反対したのであった。彼らは石井と全く決裂し、六月十日には工芸部塑造指導担当の加藤顕清講師に自分たちの指導を懇請。校長もそれを認めて（『上野直昭日記』六月二十五日記事参照）、平櫛担当の木彫部教室内に加藤担当の塑造部を設けるといふ異例の措置をとった。

加藤顕清は大正九年本校彫刻科を、次いで昭和三年西洋画科を卒業した。生徒たちからは彫刻家には珍しいインテリゲンチヤで話のわかる先輩と目されていた。その指導が六月二十八日から始まり、反対派の気持ちも静まりかけたが、奇妙なことも起こった。加藤の出講日に石井教授が先に来て、じっと坐っている。生徒たちは一言も口をきかない。やがて加藤講師がやって来たが、石井が黙って座っているの、仕方なく帰って行ってしまったという。生徒の反石

井感情は解けず、夏休みを経て十月に至り、石井作の油土像が何者かに破壊されるという前代未聞の事件が起こった（同上十月四日記事参照）。犯人は不明だったが、これも石井排斥運動の余波と思われる。

かくてまた年を越え、二十二年三月二十五日、予科、本科の及落発表があり、彫刻科の予科生四名が落第、即退校を命ぜられた。反対派はこの処置を不当とし、新たに加わった仲間たちとともに再び石井反対の運動に立ち上がった。その際における注目すべき行動は、岩手県稗貫郡太田村山口の小屋に隠遁していた高村光太郎に手紙を出したことである。光太郎は彼らの最も尊敬する先輩であったから、心情を訴え、意見を聞こうとしたのであった。先ず、筆の立つ岩田氏が手紙を書く役を引受け、幾度も草稿（岩田氏のもとに二種類現存する）を書き、五月九日、出来た文章に反対派生徒全員が署名し、それを岩田氏が速達で投函した。その手紙は今も光太郎資料中にあり、コピーその他が北川太一氏より編者に提供された。多少冗長な嫌いもあるが、生徒たちの切実な気持ちが入められた好資料なので、現行漢字に統一して全文掲載する。

先生に塑造部一同揃って、突然こんなお手紙を差上げ、煩しい思ひをおさせする不躰けをお許し下さい。学生の物知らずとて、時候の御挨拶なども申上げられぬまゝに直接本題に入らせて頂きます。

先生もお聞きになられたかも知れませんが、只今美校の塑造部は石井教室とそれに反対する多数の者とに分れて居ります。そし

て「石井先生に習ひたくない者は美校へ来て貰つては困る」「若し石井先生や私に反対の者が多くなつた場合は、私達は潔く旗を巻いて去る」と、私達の復員当初言明された石井教室笹村助教の言にも拘らず、反対派が全員の約三分の二を占めた今日、猶依然として石井教室は存在し、さうでない者も之に対抗して、美校塑造部は混乱を来して居ります。私達はその反対派と云ふ事になつてゐますから、そのおつもりでお読み下さいまして結構と存じます。

石井先生の全面的な御性格については、高村先生の方が私達学生などより、色々な面からよく御存知の事と思ひますし、私達がこゝで、先輩の方などから聞き知つた石井先生の御性格を申し上げます。煩雜でもあり、正当な判断を越えた中傷になる怖れもありますので、此処では単に石井先生が私達の復員後、私達に対してお取りになつた態度だけを申し上げたいと思ひます。そして血氣に逸り勝ちな若い者でも、その直観は往々、年配の人の理論より、純粹に物事を把握する事が出来ると思ひますので、その若い者が、こんなにも多勢、誰に指嗾されたのでもなく、石井先生を厭だと思つて居りますのには、何かそこに理由のある事だと思つて戴きたく存じます。

第一に、私達が不満に思ひましたのは、石井先生の思想的な動きで、而もそれを石井先生に指摘致しますと、生徒の前で言を左右に託される事です。現に私達が戦に死ぬべき命を永らへて、のめく〜と美校に帰つて参りました当時は、石井先生は国粹主義を標榜され、石井教室は東京美術学校とは何の関係もない私塾

であり、精神錬磨の道場であつて彫刻を教へる所ではない、と助教の口を通じて云はれ、スパルタ式教育法に賛意を表し、石井教室を松下村塾に擬へられました。私達はその当時、方向を失つて居りましたので、石井教室の教育法がもつともであると思ひ、自分達の甘さからその教育法に耐えられぬ様では恥だと思つて居りましたが、段々自分と云ふものが回復して来るにつれて石井教室の空気を不自然なものに感じ出しました。例へば石井教室では行動の自由はまだしも思想的な自由をも束縛され、誇張でも何でもなく、石井先生は太陽であり、神の如き人である。而して太陽は唯一つであると教へられます。一例を挙げれば、石井教室は昨年度の子科に対して、次の様な教育法を採つて居ります。先づ子科生はどの教室にも属さず、本科進級の際教室選択の自由が与へられて居りますのに、学年末に至つて子科全員を予科室より石井教室に半強制的に移動させ、精神状態を見ると称して、軍隊の修養録のやうな日記をつけさせて之によつて採点し、石井教室に反対の意見を持つてゐる主だつた四人の生徒を、進級教授会に先立ち予科全員の前で精神状態が悪いと発表、落第させて居ります。

御存知かも知れませんが予科の落第は即退校となりますので、全国から唯一の官立美術学校の彫刻を志望して集つて来たものでも石井教室に反対する者は彫刻が出来ない事になつてしまふのは、私達も黙つてゐるわけには参りません。他の予科生も落第が怖さに表面石井教室に従つて居りましたが、及第と共に石井教室を出たい旨、漏らして来る者が数名居ります。その話によると石井先生は「若い者はなるべく本を読まない方がいゝ。先生の云ふ

事だけを忠実に受け取つてゐればいゝ」と云はれてゐるさうですが、やはり西洋文化を否定される石井先生の教育法より、西洋のヒルデブランドあたりの彫刻理論を勉強してみたい意嚮を洩らして居ります。私達も石井先生の作品を全面的に否定する批判力を持ちませんが、ギリシヤからロダンに至る西洋彫刻の本道から離れた小さいものゝ様な気がして、石井先生の国粹主義にどうしても賛成出来ません。現に石井教室に残つてゐる少数の友人達の作品を見ましても、私達の偏見かも知れませんが、変に瘦せこけて、額や顴骨のヴォリュームばかりを極端に誇張した、十人が十人共まるで同じ様な作品を作つて居ります。若し今後も予科が全員石井教室に入らねばならぬとすれば、将来の日本の彫刻展覧會に、あの様な小石井的作品ばかりが並ぶだらうと思ふと寒心に絶えませぬ。なほ気の毒なのは石井教室に慊らなくなつて自分だけ飛び出し何処かの教室の一隅で作りはじめた人達の作品は、その影響から逃れようとする痛々しい努力の為、私達が見てすら之が彫刻かと疑ひたくなる様な途方もなく大きなものや干乾びていぢけた物を作つて居る事です。私達は決して自惚れてこんな事を云ふのではありません。それ所か私達も石井先生から逃れて、心からついて行ける先生がないので模索して居ります。あがいて居りま

民主主義ではないと申上げたところ、あれ程以前国粹主義を云々して居られたのに、「さうですかねえ、石井教室は戦争中から民主主義だつた筈ですがねえ」と答へられたので、生徒が憤慨したり口惜しがつたりして居ります。私達としまして、学生は学生なりの人道主義がかつたのや、虚無主義を気取つたのが居ります。之は自分で苦しんで次の段階へと進んで行くべきもので、強制されて石井先生と同じ傾向に嵌められたくありません。況して日記によつて精神状態を判断され、彫刻家には不向きだと烙印を捺されたくありません。

第二に私達は今、学校に於てしか勉強出来ません。資材、モデル、住居等の関係から、如何に石井教室が厭だと云つても、学校をとび出してしまつたら、恐らく、高村先生が御想像なさるより以上に、私達の行く所は見当らなくなつてしまひます。そこでどうしても学校を離れたくないので、木彫の平櫛教室の一部を割いて貰つて塑造をやつて居ります。新しい先生をお迎へして、石井、平櫛教室の他にもう一つ教室を作つて貰ひたいのですが、学校当局の方で、予算とか人員とかの関係で許可してくれません。

——此処で一つ高村先生にお詫びしなければならぬ事は、私達が何時か校長先生に陳述したとき、「そこで石井君の代りに誰に来て貰つたらいいのかね」と云はれて、皆が高村先生とお答へした事です。その時は何も知らずに、皆してお願ひさへすれば先生に来て戴けるものと思つて居りましたが、後から校長先生に高村先生がお出にならない旨をお聞きし、又石井先生からも「初めは私と高村さんと二人でやる事になつてゐたのですがね、

高村さんが来ないと云ふので、私だけが来たわけです」と聞かされたりして、実に先生に対して申し訳ない事をしたと思ひました。

私達ももう先生に来て戴く夢は諦めて居ます。どうぞ失礼の段、そして幾分でも御迷惑をおかけしたかも知れない所はお許し下さい。唯困るのは、私達は勉強したい故に独立して教室を貰つたので、決して石井教室に対抗するつもりは有たなかつたのですが、石井先生は私達を「策動者」と呼ばれ、余つてゐたので私達が使用してゐた教室を石井教室に属してゐる部屋だからと云つて取り上げられたり、私達の地位が不安定なので、予科生のこちらへ来たがつてゐる連中迄、石井教室に強制入室させたり、又今年の三月には私達のうち三年生だつた者全員を卒業させてしまつてくれと平櫛先生にお頼みになつたと云ふ話さへ、或る先生から洩れて居る事です。私達は昔の方々の様に卒業して外国に勉強に行くこと云ふ夢も与へられて居りません。材料もモデルも学校を離れてすぐ入手する事は困難です。研究科さへ今年の九月で廃止されます。それなのに実技の実力と云へば、軍隊生活の空白の為、昔の本科一年生の力ほどしかありません。石井教室に残つた唯一人の最上級生（他は皆私達の方へ来てしまひました）は、軍隊へ行かなかつた為、もう五年生であるべきですが、一向に卒業の気配もなく、私達だけが卒業に脅かされるのは心外でなりません。又、石井先生がこんなに迄して、取るに足らない私達学生分際と争はれ、美校彫刻科は非常に好成績を取めてゐると文部省に手紙を出されたりして「反対者が多くなつた時は潔く去る」と云はれた美校教授の椅子に飽迄末練を残して居られるらしい御様子に

は、私達は矛盾より先に何か不純なものすら感じさせられます。

第三として生徒の身分でありながら、自分達の校長先生を批判するのをお許し下さい。校長上野直昭先生は人格者で、実にいゝ方である証拠には、否定好きな私達若い者共でさへ校長先生を悪く云ふ者は居りません。而し、實際的研究などでこつ／＼叩き上げて有名になつた方でなく、安倍能成氏等一群の学者の方々とヒューマニスティックな交友関係を持統されて今日に至つた方でずので、所謂学者肌で、完成された美術家などを深く尊敬される傾向を持つて居られます。当然私達嘴の黄色い学生達の云ふ事より、石井先生の人格を信用されるのも無理ないと存じますが、その為、石井先生の云はれる事をそのまま、私達を「なまけ者」と見とお出の御様子が見えます。私達は確かに石井教室へ行きたがりませんが、彫刻に対する意慾にかけては石井教室で優等生と見做されてゐる人達に絶対に劣らないと信じます。私達の数年先輩の方々には、私達の立場を理解して積極的に相談して下さり、校長先生にお会ひしたりして下さる方も居られますが、校長先生から見れば未だ若く、その言は信を置くに足らぬ様にお思ひになるばかりか、悪くすると、その方達が反対に私共を煽動されてゐる様におとりになられても仕方ありません。やはり校長先生には人格的に校長先生が信頼され得る、完成された大家の方から云つて頂かねば無理に存じますが、さう云ふ大家の方になると、私達学生の悩みを若い者の心になつて見て下さる方がなく、私共は途方に暮れてゐます。

以上くどく／＼申し上げました様な理由で、私達は先生の静かな

御勉強を掻き乱す非礼をも顧みずに御相談申上げました。猶本当の所を申し上げてしまひますと、私達一同、高村先生から校長先生に宛て、「石井君は教育者には不向きだ」と云つて頂きたかつたのです。さうすれば高村先生を深く尊敬されてゐる校長先生の事故、信じて下さると思つたのです。でも元々石井先生が教育に不適任だと思つて居られるなら兎も角、私達の手紙ぐらゐで軽々しくさうお思ひになる先生ではないと思ひますので、若しそんな人を誹謗する様な事は出来ないと仰言るのでしたら失礼の段幾重にもお詫び致します。そして先生から、私達の考へが間違つてゐるなら間違つてゐる、何か方法があればどうしたらよいとお教へ下さいましたら、この上なく幸甚に存じます。先生の御時間をお邪魔しました事を深くお許し下さい。

研究科

板谷 慎
建 昌 覚 造
長 島 利 雄
吉 野 康 彦
今 宏
瀧 川 博
本 科
野 崎 一 良
中 野 將
内 田 英 也
手 嶋 脩
大 橋 康 造
村 井 真 一

岩 田 健
陶 山 寛 義
原 国 政 哲
土 谷 武
池 田 春 夫
大 塚 亨
佐 々 木 日 出 雄
五 十 嵐 芳 三
福 原 肅 雄
大 岡 英 代
小 坂 圭 二
阿 井 正 典
高 崎 元 尚
田 村 興 造
加 藤 祐 一
伊 丹 久 雄

光太郎は返事を出さなかつた。それは二ヵ月後の七月三日に彫刻科昭和十二年卒業生西出大三に出した封書〔高村光太郎全集〕第十五卷。昭和三十三年、筑摩書房〕に、「美校彫刻科の騒ぎも困つたものですが、他からは一寸語を挟む事が出来かねます。四月頃でしたか、彫刻科生徒が連名で小生にまで其の事について校長に何か進言してくれといふやうなことを言つてまゐりましたが、返事の出来ない事柄が含まれてゐるので、生徒さんには氣の毒でしたが、返事せずに

りました。事情はほぼ推察がつくのですが、やはり生徒自身で解決する外はないでせう。しかし、小生は青年が好きです。青年のムキな気持は愛すべきです。」と記していることから分かる。なお、翌二十三年八月十二日同人宛てのはがきには「先日石井鶴三氏が助教の笹村草家人氏等と御一緒に来訪、久しぶりに鶴三氏におめにかかつて愉快でした。去年あたり彫刻科の生徒さんがいろいろな事を訴へる手紙をよこしましたが、笹村氏に會つて、そのいはれがよく分るやうに思ひました。今ではもう彫刻科も落ちついてゐる事でせう。」と書いて、彼は生徒たちに同情的だったようである。

反対派生徒たちは、このように光太郎に手紙を出す一方、世の注意を喚起しようと試みた。すなわち五月十日の新入生歓迎会の席上、彼らは石井教室反対の宣言をなしたのである。新聞記者がここに駆けつけ、翌日の新聞には早速記事が登場した。反対派生徒の父親でGHQに関係を持つ一画家が乗り出して、「超国家主義」の言動のある笹村を排斥すべく前出の「伝心録」を提出させたのもこのときである。彫刻科は正に混乱状態となった。

前々から事態を憂慮していた校長は、平櫛教授に善後策を依頼していたのだが、平櫛はこの十日に校長室を訪れて、石井に「おとなしい女房役」をもう一人持たせ、自分の方には菊池一雄を新規採用したいと申し出た。そのため、校長は十三日、石井および菅原安男、西本順らと談義し、平櫛案に則して山本豊市、菊池一雄の両名を採用して他日もう一教室増設してもよいという決定を下した。そして、直ちに準備を始め、一方では西本や西田正秋が生徒の相談役として親しく対応した。こうした措置がとられた結果、左記の岩田

氏の日記にも明らかのように、二十二日には漸くにして反対派も妥協するに至ったのであった。

22・5・22 校長、西本先生、四時、帝室博物館食堂に、村井、小坂、阿井、中野、野崎、岩田を呼び、妥協案提示。すなわち、平櫛教室に新作の菊池一雄氏、院展の山本豊市氏を招き、指導を仰ぐ。行く行くは石井教室と対等の教室とする。但し、菊池氏は京都の絵画専門学校〔現京都芸大〕の教授を引き受けたばかり故、無理は利かないと思う。

之以上校長先生に迷惑かけたくないで、この辺で折合う事になる。それから校長先生と雑談。六時半迄。

翌二十三日、生徒たち十五、六名は連れ立って東北沢の菊池一雄宅を訪れ、早期着任を懇請。六月十六日には菊池、山本両者に講師の辞令が下りた。その後、笹村が石井教室側の声明書（反対派を激しく糾弾するもの）を公表しようとしたため、生徒が再び反対行動を起こしそうになり、校長が公表を差し止めるなどのことがあったが、新任教師、特に山本豊市が親切に指導にあたったことや、反対派生徒の多くが卒業制作に専念するようになったことなどにより、反対運動は終結した。

② 天竜峽に分校設立計画

天竜峽の景勝地に建つ仙峽閣は純和風の風情豊かな旅館であった。原彰一著「仙峽閣物語」（『週刊いいだ』平成元年六月二十二日、信